

令和2年度

第2回校内研修会

「児童生徒が、自ら考え、学びたくなる授業づくり  
～適切な実態把握と目標設定を通して～」

- 1 目的 国語の教科指導を行うために必要な実態把握や、その実態把握に基づいた目標設定に生かす取組について理解を深め、授業力の向上を図る。
- 2 日程 令和2年10月30日(金)16:00～17:00
- 3 会場 広島県立呉特別支援学校(プレイルーム,会議室2)
- 4 内容 講義及び演習  
「児童生徒が、自ら考え、学びたくなる授業づくり  
～適切な実態把握と目標設定を通して～」  
講師 認定NPO法人 やまぐち発達臨床支援センター 理事長 川間 弘子先生



前回に引き続き国語の指導を行うため、講義を受け演習を行いました。見方が変われば関わり方が変わるということで、子どもの様子をよく観察し、発達段階を見極め、目標を設定することが大切だという事を再確認しました。今回はコロナウイルス感染症対策でリモート研修となりました。子どもの活動の様子を動画で視聴し、その子の実態や目標設定をどのようにすれば良いかをグループで意見を交わした後、リモートで川間先生とやり取りして研修を深めたり、書字につながる前段階となる演習を行うなどして有益な研修となりました。研修で学んだ一部を紹介します。

～知的に重度で、気付きの段階にある子ども～  
子どもから手を出すような五感を刺激する教材(光・動・風・音)を使用。また、触覚過敏がある子どもは、正中線に近いほど過敏なので、最初に顔を軽くタッチするような顔遊びは厳禁。

～点から線の世界へ～ 演習  
自由描きから方向を伴う線分へ  
ペアで児童生徒役と指導者役になり、ペグ差しの演習を行った(今回はおはじきをペグに見立てて行った)。おはじきを提示する位置で難易度が変わる。この活動が、始点終点の2点間を意識して縦線を引く活動につながる。

(※ その様子を右下の左側の写真で紹介⇒)  
縦線→横線→閉じた円→十字が書けることが、文字を書く基礎となる。

～見て手をコントロール～  
輪抜きの課題

上に抜く、手前に抜く、奥に抜くのでは難易度が変わる。

上に抜くとき、手元を意識するより終点を意識して抜けるようになることが、書字につながる。

(右上図は、上から見た右利きの子の例です)

